

# 市民のページ

## お届けします 「八重の桜」通信



2013年の大河ドラマで、会津藩士の娘・新島八重を主人公にした「八重の桜」が放送されることになりました。ここでは、新島八重に関する歴史やドラマに関連することなどを紹介していきます。

その10

## 襄との結婚生活

**襄**は学校設立のため、3カ月ほど覚馬の家で生活しています。襄と八重が婚約したのは、1875年10月のことです。11月に、襄は念願の同志社英学校を開校しました。1876年1月2日、八重は洗礼を受け、翌3日に、二人はキリスト教式の結婚式を挙げました。洗礼も洋風の結婚式も、京都では初めてのことでした。

**現**存する新島旧邸には、ベッドなどの家具が残っており、二人が洋風の生活を送っていたことが分かります。八重は度々、自

宅で学生に西洋料理をこちそうしたそうです。しかし、八重に対する学生や世間の評判は芳しいものではありませんでした。「悪妻」「烈婦」、中には「鵠」という者もいました。これは、後の

評論家で当時同志社の学生だった徳富蘇峰の言葉です。蘇峰は、尊敬する襄を

「頭と足は西洋、胴体は日本」と酷評します。帽子を被り靴を履き、服は着物という八重のスタイルやその振舞いを非難したのです。これを八重も聞いてい

ましたが、軽く聞き流したそうです。

**悪**妻と言われた八重は、夫を「ジョー」と呼び捨て、二人乗りの人力車に乗る時も夫より先に乗りました。これらのことは、長く男女平等社会のアメリカで暮らした襄にとって、ごく当たり前のことでした。襄はアメリカの恩人への手紙に「彼女は見た目は決して美しくはありません。ただ生き方がハンサムなので、私にはそれで十分です」と記しています。

**そ**の後、二人は日本各地にキリスト教の伝道に出掛け、1882年には若松を訪れています。また、札幌では幼なじみである内藤(旧姓日向)ユキとの再会も果たします。

**1**890年、病気がち若さで亡くなります。14年間の結婚生活でした。その後、八重は社会福祉事業に活動の場を見いだします。

▼監修：会津歴史考房主宰・野口信一さん



結婚当時の新島襄と八重(同志社大学提供)

二人が結婚したのは、襄が32歳、八重は30歳の時でした。その後、八重も女学校の設立に関与するなど、襄とともに教育の普及に関わるようになります